

## 【 図画工作科 】 教科提案

### もてる力を発揮し、心地よさを味わう図画工作科学習

#### 1. 研究テーマ設定の理由

##### (1) めざす子どもの姿

図画工作科における、子どもの豊かな学びとは、「造形表現活動を通して、子どもが思いや願いを持って、素材や題材・場所・道具・人とかがわり、主体的に自分らしく表現し、学びのよさや楽しさ、心地よさを実感、共有している営みである」と捉えている。それは、学習の中で、子ども自身がすすんで素材や題材への働きかけをし、その過程で、材料の使い方や組み合わせ方を発見し、配色の美しさや形のおもしろさを感じ取り、新しい学びや表現を見つけ、つくりあげていく姿を指している。図画工作科の学習は、つくりだすことそのものが目的であり、作品はその結果として表れるものといえるだろう。造形活動において出来上がったもの（作品）より、そこに至るまでの「こと（過程）」が一層重要なのである。そのような活動を通して、子どもは、挑戦しようとする気持ちや固有の概念から解放される感覚など、つくりだす喜びを感じ取っていく。

図画工作科で育てたい学力は、「手加減」「手触り」などのような身体感覚も含め、ものの見方や感じ方、考え方、表現の方法、行動の仕方といったもので、生きていく上で根底をなすものである。子どもたちは、土や砂、水などの自然環境（空間や自然物）や身の周りの環境（人工物や場所）、まわりの人とかかわりなどといった学びの環境のもとでそれらを獲得していく。対象にかかわりながら、イメージしたことを試したり、次にしたいことをみつけたり、さらにつけたしたり、今までのものをつくりかえたりするというような体験や活動を通して育てていくのである。そこには、子どもたちが思いのままにもてる力を働かせる姿がある。そのような状況をつくるためには、子どもたちが自分の造形活動に心地よさを感じながら進めることが重要なのではないかと考えた。

そこで今年度、図画工作科では、子どもの豊かな学びをめざすために、

#### 『もてる力を発揮し、心地よさを味わう図画工作科学習』

というテーマで取り組んだ。ここでいう心地よい学習とは、次のようなものである。

- 子どもが心を開き、一人一人がもっている思いや願いをふくらませ、具体的な形に表すために、自分らしい表現方法や色合いなどをつくり出す心地よさを味わう学習
- 自分の思いや願いを表現できた喜びや満足感を仲間に出出するときの心地よさや、自分の思いや願いを受け入れられることで感じる心地よさを味わう学習

このような心地よさを感じながら、造形活動における自分らしいよさをより確かなものにしていく子どもを育てたいと考えた。題材・素材・道具との対話や、自己内対話であたためた学びを主体的・創造的にひろげ、仲間の造形感覚や感性に共感したり、違いを認めたりする学習をめざし、実践を行った。

## (2)「意味と内容」がひろがる図画工作科の学び

図画工作科の学びは、色や形にかかわる活動の中で、それらと自分との関係をつくりだしていくことによって成立する。

図画工作科学習において、子どもが「意味と内容」をひろげているといえるのは、

- ・対象とかかわるうちに次の活動を思いつき、主体的、意欲的に活動を進めている姿が見えたとき
- ・対象へのかかわり方に違いが表れ、その活動や表現に質的な変化が見られたとき  
また、その子なりのこだわりが生まれたとき
- ・まわりとのコミュニケーションから対象への新しいイメージを持ったり、今までもっていたイメージをつくりかえたりしながら活動している姿が見えたとき

であると考えている。図画工作科では、このような「意味と内容」がひろがっていく学習をめざしている。そのために、子どもの表現意欲を引き出す題材の設定や素材選び、それらとの出会いである導入の果たす役割を大変重要なものと考えてきた。また、一人一人の子どもの丁寧なみとり、子どもの思いを受け入れた適切な支援についても、課題として取り組んできている。そこで、「意味と内容」はひろがる学習をつくるために大切にしてきた“題材設定のポイント”と“子どものみとりと支援”について述べる。

### ①題材設定のポイント

「やってみたい」「かいてみたい」「つくってみたい」という意欲は、図画工作科の学習の中で、子どもの学びの核となるものである。上で述べた「意味と内容」がひろがる学習をつくっていくために、

○子どもが“もっとしたい”“次はこうしてみたい”と感じられるような課題意識を与えられるものであるかどうか

○子どもの表現活動がひろがる可能性をもつものであるかどうか

ということを軸に学習を計画するようにしてきた。

そして、子どもたちが出会うひとつひとつの「題材」は、その学習をつくっていくもととなるものであり、その「題材」によって、子どもの表現意欲が喚起されることも確かである。そこには、子どもがつくりだす喜びを感じることができると手応えが用意されていなくてはならない。「いいかんじだな」「おもしろそうだな」といった子どもの興味・関心を刺激し、「やってみたい」「ためしてみたい」という活動欲求を誘発するような「題材」設定をしたいと考え、次のような点を大切にしてきた。

#### 題材設定のポイント

- ・子どもにとって魅力的な色や形、材料や場所を扱った題材であること
- ・子どもの五感をゆさぶり、からだ全体を通して取り組めるものであること
- ・自分の表現が選択できる学習過程が設定されていること

また、題材の目標に示す資質や能力を設定するに当たって、子どもの発達段階に沿っているかということや、その構想を裏付けるための知識や技能が身に付いているかといった、それまでの子どもたちの造形経験についての把握も重要なものと考えている。

### ②子どものみとりと支援

子ども一人一人の見方や感じ方、表現方法、そして、その学習過程を大切に作る図画工

作科の学習では、教師がさまざまな活動の場面を捉えて、一人一人の思いをみとり、どう支援するかということが、学習のひろがりや深まりを左右したり、子どもの意欲の高まりに影響したりする。また、今年度の研究テーマ『もてる力を発揮し、心地よさを味わう図画工作科学習』を追求し、一人一人の子どもが“もてる力を発揮し、心地よさを味わっている”かどうかを考察していくためには、子どもの丁寧なみとりと適切な支援が必要不可欠なものとなる。そこで、具体的に次のような手だてをとり、子どものみに活かしてきた。

- ・子どもの反応や表情、つぶやきを記録したり、全体の場に取り上げたりすること
- ・子どもの表現や活動から生み出されるものや出来上がったもの、作品などを記録すること（写真、ビデオなど）
- ・学習カード（図工カード）を効果的に活用すること

みとり

そして、みとったことを活かして、次のような支援を心がけてきた。

- ・よさを認める言葉がけ、賞賛
- ・意欲や関心が高まるような励まし
- ・つまずきや悩みによりそい、受け入れ、いっしょに考えていく共感姿勢
- ・必要に応じ、タイミングを見計らった技能的な指導

支援

子どもたちのつぶやきは、心の動きの表れである。それを知ることは子どもの見方や感じ方を知ることにつながる。それらを記録することは支援の重要な手がかりとなる。そのつぶやきが全体に必要な気づきであり、活動の大切な要素になると考えられる場合は、学習の中でも意図的に取り上げるようにした。また、活動の様子やその表れとして生まれてくるもの（作品）を記録することは、子ども自身が活動の過程で自分の表現を確かめることができるとともに、後でその記録を通して活動や表現を振り返ることができるというよさがあった。そして、学習の中で持った思いや願い、悩みを絵や言葉、文章にして残していく学習カード（図工カード）は、子どもの学びの足跡となっていくものである。それを活かし、子どもの思いや活動の進み具合、また、つまずきや悩みを知ることができ、子どもが必要としている場面をとらえて、言葉かけや技能的な指導を行うことができた。つまり、子どもが自分の活動や表現を進めていくのにも活かされるのと同時に、教師が子どもの見方や感じ方、表現や活動をみとり、適切な支援を考えるのに活かすことができたのである。このように、みとりと支援が一体となって働き、子どもの学びを支えるよう心がけてきた。

## 2. 図画工作科学習でのまなざしの共鳴

子どもは、自然な形で造形活動そのものを、また、その活動から得られる感じや思い、学びを楽しみながら進めていく。そこには造形活動における子どもの学びの姿が浮かびあがってくる。

### ①造形活動におけるコミュニケーション

造形活動をしているときの子どもたちは、自然な形でコミュニケーションを取り合っている。対象に働きかけながら、自分のイメージをふくらませたり、表現方法を構築したりして、新しい活動や表現をさがしていくには、まわりとのコミュニケーションが大切にな

ってくる。まわりとのコミュニケーションとは、周囲の環境であり、身近にある素材や道具であり、いっしょに学習に取り組んでいる友達であり、仲間であるといえる。子どもたちはそれらと自然にかかわり合っているのである。ひとつの題材から学習が始まっても、子どもたちはさまざまなものに目を向けている。“自分の表現から生み出したものが違う場所に飾られたらどう見えるだろう”と考えて、場所を探すことは周囲の環境とのコミュニケーションであるし、“あの素材と組み合わせたら・・・”“あの道具を使ったら・・・”と考えることは素材や道具とのコミュニケーションであるといえる。また、友達の表現やよさに触れることや一緒に試したりつくったりすることで、自分の思いがはっきりし、表現することの意欲が高まってくることも多い。そして、これらのコミュニケーションから得たことやよさを採り入れながら、活動や表現、そこから生まれる学びがひろがり深まっていくのである。

## ② 図画工作科における「まなざしの共鳴」

前項の“造形活動におけるコミュニケーション”は、題材や素材、道具との対話、友達や仲間との交流、ひびき合いであり、この姿を「共鳴」と言い換えることができるだろう。図画工作科における「共鳴」は二つあると考えている。一つ目は、題材、素材との共鳴である。これは子どもがその対象とかかわり、そこから得られる感じや思いをひろげたり、深めたりする姿を指す。一人一人がもてる力をつなぎ・つなぎ直しながら、「ああでもない」「こうでもない」と自分との対話をしながら作り続ける過程で、対象とかかわり、そのイメージを新しくつくったり、今まで持っていたイメージをつくりかえたりしていく。そして、自分らしさをみつけたり、対象と自分との関係を近づけながら自分の世界をひろげたりしていくものである。二つ目は、なかまとの共鳴である。それは、子ども同士が互いの表現のよさを伝え合い、認め合い、ひびき合う姿を指す。自分らしい表現を追求するうちに、同じ活動をしている友達、同じ感じ、思いを持った友達と、学んだことのよさや楽しさを交流したり、また、違う活動をしている友達、違う思いを持った友達と、自分の表現や活動を照らし合わせて、違うことのよさやおもしろさを感じたりすることである。

表現や活動の過程で子どもたちが出会う問題は、様々なものがある。つくり・つくりかえ・つくり続ける過程で、子どもたちはその問題の解決のために、もてる力を働かせる。そこでは、最初の計画を変更し、つくりつつあるもの（作品）から表し方の糸口を見つけることもあれば、アイデアに行き詰まって、友達のアイデアを自分の表現に取り入れることで解決することもある。また、必要な材料がなく、手持ちの材料を代用することで問題を解決することもあるだろう。このような力が働くには、それまでの造形経験で得た知識や技能を活かすことや問題に応じて柔軟に対応しながら、もてる力を総合的に関連的に働かせる知恵が必要になる。思いや意図の実現、問題の解決に働く知恵は、偶然やってくることもあるが、友達の知恵や表現に学んだりすることも多い。このような新しい力の獲得や自分の世界のひろがり、友達やまわりの仲間とのひびき合いやそこから生まれた知恵、表現方法の深まりが「まなざしの共鳴」である。すなわち、上で挙げた二つの「共鳴」が絡み合いながら、子どもの造形活動は進められていくのである。「まなざしが共鳴する」実際の場面は、具体的に各実践の中で取り上げ、考察している。

今後も子ども一人一人が造形活動に心地よさを感じ、互いのよさを認め合いながら、学ぶ楽しさやおもしろさを味わえるような学習を目指して研究を進めていきたい。